

洋画部門審査評

洋画部門の応募数は156点で昨年より微増といったところでしたが、入選者数は約50%の79点で、彫刻部門を除いた部門では最も厳しい入選率となりました。それだけに少しでも入選させたいと思う審査員たちにとっては、厳しい判断が迫られ、仕方なく事務局から示された数字に則って審査することになりました。結果からいえば全体的に魅力のある作品が増えたように感じられました。

最優秀賞の《三日月を待ちながら》は、描かないではいられない作者の熱が見る者に伝わってくるような勢いのある作品で、受賞を審査員全員が一致しました。暴れるような筆触に対して調和的な色彩が抑えを利かせています。記念写真的な題材を描いて優秀賞となった《宮参り》は、いわゆる上手な絵とは言い難いですが、丹念に重ねられた筆触の独特さと鶴なども描き込まれるなど、どこかおとぎ話のような素朴な雰囲気をもった個性が光る作品として評価されました。もう一つの優秀賞《A study of the relationship between Subjectivity time and memory XXXII》は空間表現をうまくまとめた作品です。一見すると抽象画のようですが、よく見ると樹木の形態が立ち現れて風景を土台としていることが解ります。そこに幾何学的な形を描き込むことで全く別の世界を出現させて絵画世界を広げていると言えるでしょう。岡田文化財団賞の《四日市コンビナート》は、三重県の代表的な風景のひとつともいえる工場地帯を画面構成の題材として取り込んだ作品です。しかし単なる再現描写に終始することなく、極めて鮮やかな色彩のコントラストと大胆な構図によって、見る者に強いインパクトを与える作品としてまとめる力を感じさせる作品となっています。市長会長賞の《カレー屋の店主》は何とも言えない惹きつけるものがあると審査員が皆推薦した作品です。それは描かれた人物の体形であったり表情であったりがその魅力の元ではありますが、何を描いているのかわからない不思議な形と色の背景と相俟って、作者の個性となっているからでしょう。町村会長賞の《たびたち》はタンポポの咲く地面を真上から捉えた作品です。緑色の色調の変化や違いによって平板にならない奥行きと黄色い花や白い綿毛の配置もよく計算されています。緑色だけで構成するのは実はとても難しいと一審査員は特に強調されていたことを付け加えておきます。すばらしきみえ賞の《私》は今まさにマスクを外そうとする自分自身を大きくクローズアップして描いた作品です。受賞者の中では最年少の高校生ですが、コロナ時代に思春期を過ごしている若者が自分自身を見つめながら前に踏み出していこうとするような意思まで感じさせる自画像となっています。こうした若者がまさに「すばらしきみえ」を支えていってほしいと思います。for your Dream 賞の《燕花響命》も一見すると抽象画のようですが、よく見るとツバメや花が題材となって画面を構成していることが解ります。美術史的な解釈から言えば分析的キュビズムの手法を使いつつ、その色彩と共に画面の分節により全体に統一感を与えています。自然の恵み賞の《津の町美杉町八知 2024》は木版画で、モノクロームの大画面による風景画です。みえ県展で常連になっている作者の新作です。自分のスタイルを確立することは容

易いようで実は難しく、自己模倣になってしまう危うさも秘めています。方法論は同じでも対象の捉え方を工夫することによってさらなる展開も期待できるものです。

最後に一言申し上げたいことですが、一次審査に残った作品の中に偶然似たとは言い難い、海外有名作家の作品をそのままねた作品がありました。審査員が気づきましたが、模倣はあくまで模倣で終わってしまいます。コンクールに出品する作品は自らの個性を表現するという制作によって成り立つものです。ぜひ自信をもって自らの表現を探求していただきたいと思います。

洋画部門審査主任

高橋秀治